

町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅲ

平成29～令和2年度 町内遺跡発掘調査等

—億首川流域古墓群悉皆分布調査ほか—

2021年(令和3)年3月

金武町教育委員会

町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅲ

平成29～令和2年度 町内遺跡発掘調査等

—億首川流域古墓群悉皆分布調査—

2021（令和3）年3月

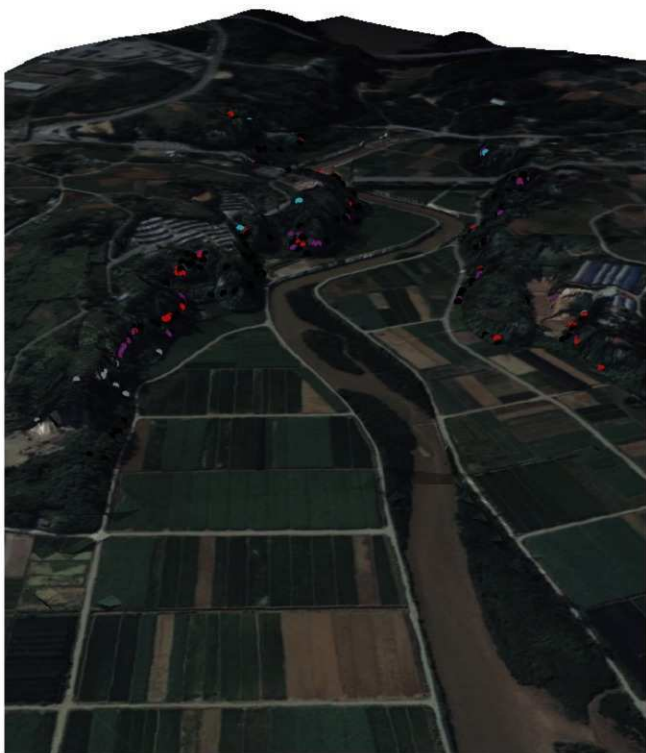
金武町教育委員会



※1 億首川周辺の地形模型（億首川重点地区模型：1945年（昭和20）年 米軍空撮写真）

平成 18 ～ 27 年度億首川地域やギンハル訓練場跡地内で町内埋蔵文化財予備調査を実施し古墳や交通遺跡群等多くの文化財を確認した。発掘された多くの文化財や地質土壌は億首川流域環境と密接な関係を持っており、町民が立地環境と埋蔵文化財の関係を模型を見ながら深く理解することを目的に作成した地形模型である。（埋蔵文化財活用事業）

巻頭図版 1. 億首川流域模型写真



*2 国土地理院基盤地図情報（数値標高モデル10mメッシュ）及び沖縄県撮影画像データ（OKC931～C31-18 19930604 1993年撮影）を一部使用し3Dモデルを作成

卷頭図版3. 調査地遠景（2018年12月6日撮影）







卷頭図版4. A01号墓（岩陰掘込墓）・H28号墓（岩陰石積墓）

上段：A01号墓

下段：H28号墓



巻頭図版 5. M24号墓（岩陰掘込墓）・M50号墓（掘込墓）

上段：M24号墓

下段：M50号墓



卷頭図版 6. M47号墓（掘込墓）・H01号墓（仮墓）

上段：M47号墓

下段：H01号墓

はじめに

本報告書は、金武町教育委員会が文化庁国庫補助を受けて『億首川流域古墓群悉皆分布調査』の成果をまとめたものです。

億首川流域古墓群は、億首川を望む丘陵一帯に、横穴を掘り込んで造られた掘込墓や岩陰を利用した岩陰墓などを主とした古墓群です。平成29年から平成31（令和元）年まで継続的に実施した分布調査で確認できた古墓は合計210基を数え、その調査成果から億首川流域古墓群は、近世から近代、現代にかけて、造営されたことがわかりました。調査した古墓のなかには、金武町の民話と伝説に登場する「ギミンノヘイカ」の墓と伝えられている古墓や、今まで知られていなかった古墓も再び日の目を見ることになりました。また、出土品では、方言でボージャーと呼ばれる骨を収めた専用蔵骨器や蔵骨器転用品のほか、沖縄産の甕、香炉や本土産陶磁器などの遺物が得られました。

今回の調査によって、発見された貴重な文化財が町内にあることは、私たち町民の誇りであります。本書が今後の諸調査や学術研究、歴史学習の基礎資料として活用されとともに、多くの町民が郷土の歴史や文化について関心を深め、“薰り高い教育文化のまちづくり”に寄与することを願います。

末尾になりましたが、現場調査から報告書発刊に至るまで、ご協力いただいた皆様、並びに関係各位、そして町民の皆様にご心より感謝申し上げ、発刊のご挨拶と致します。

2021（令和3）年 3月
金武町教育委員会
教育長 比嘉貴一

例 言

1. 本報告書は、平成29～令和元（2017～2019）年度に金武町が榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店に委託し実施された「億首川周辺古墳群分布調査」の成果を収録したものである。
2. 記録保存対象である億首川流域古墳群は国頭郡金武町字金武小字甘喜原・宮城原・田慶志原・飛留喜田原・頭呂地原に所在する。
悉皆分布調査は平成29～令和元年度に実施、資料整理・古墳実測・報告書作成を令和元～2年度に金武町教育委員会・榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店で行った。
3. 資料整理・古墳実測・報告書作成は、金武町教育委員会・榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店の下記のメンバーで行った。（令和元～2年度）
洗淨・注記
仲本洋太・屋比久美香子
接合・復元
仲本洋太
遺物実測・トレース
仲本洋太
遺物分類・観察
仲本洋太・岸本卓己・川島 淳
遺構実測
仲本洋太・岸本卓己
榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店
喜屋武志保・高橋 亨
表・図作成
仲本洋太・岸本卓己
榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店
青木翔太郎・高橋 亨・平島義孝・山形咲月
図面調整・レイアウト
安座間充・仲本洋太・岸本卓己
榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店
青木翔太郎・高橋 亨・平島義孝・山形咲月
4. 本書の編集は金武町教育委員会 安座間充 監修の下、榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店 山形咲月の協力を得て同社青木翔太郎が行った。
5. 本書の執筆分担は、本文目次に記載した。
6. 本書掲載写真について、悉皆分布調査の遺構記録写真は榑理蔵文化財サポートシステム沖縄支店

の調査員が撮影した。遺物及び展開写真は岸本卓己が監修し、仲本洋太が撮影した。

7. 本文中で使用した引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。
8. 本書に掲載する記録類（各種図面・写真等）及び採取遺物はすべて金武町教育委員会に保管している。

凡 例

1. 本書掲載図（遺構図等）における座標軸は平面直角座標第XV系（世界測地系）を使用し、基準方位は座標北である。
2. 遺物観察における色調判定は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（マンセル表色系）に準じている。
3. 遺物実測図の縮尺は下記のとおり
専用蔵骨器（蓋・身）：1/6
沖縄産陶器（甕・壺）：1/6
沖縄産陶器（香炉）：1/3
本土産磁器（湯呑）：1/2
4. 遺物実測図とともに掲載する各遺物写真は通常撮影によるものである。遺物実測図に対応するように写真の正射投影に近い箇所を縮尺を合わせている。
5. 各遺物の部位名称、計測位置等は遺物観察表に記載するとおりである（第四章第6節）。
6. 遺物観察表中における（ ）記載の計測値は図上復元等による推定値である。
7. 本書掲載の図・写真・表番号は【章番号＋章単位による連番】構成で記載している。
（例）第1章内で2番目に掲載する図→図1.2
第IV章内で6番目に掲載する写真→写真4.6
8. 本文中の注釈（※1、※2…）は、頁単位で同頁下に記載している。
9. 小字名称（ハル名）は、必要に応じてルビを付し、方言表記は片仮名で記載した。なお、表記は下記の文献を参考とした。
※池原 隆「並里の地名」並里区誌編纂委員会編『並里区誌戦前編』並里区事務所 1997年

本文目次

巻頭図版	i
あいさつ	viii
例言・凡例	ix
第Ⅰ章 調査の目的と経過	(安座間) 1
第1節 調査に到る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	8
第1節 金武町の位置と概要	(仲本) 8
第2節 金武町の地理的環境・自然的環境	(玉元) 9
第3節 遺跡周辺の歴史的環境 (川島)	11
第Ⅲ章 遺跡の概要と調査方法 (岸本・青木)	14
第1節 億首川流域古墓群の概要と調査方法	14
第2節 古墓の分類	22
第3節 遺物の分類 (蔵骨器)	23
第Ⅳ章 調査の記録 (遺構と遺物)	(仲本・平島) 28
第1節 甘喜原地区の遺構	28
第2節 宮城原地区の遺構	35
第3節 田慶志原地区の遺構	61
第4節 飛留喜田原地区の遺構	72
第5節 頭呂地原地区の遺構	90
第6節 遺構の立地について	97
第7節 遺物	(岸本・仲本) 105
第Ⅴ章 総括	(岸本・青木) 108
引用・参考文献	112
附編	114
1. 億首川下流域埋蔵文化財予備調査－緊急調査の記録－	(玉城・仲本) 114
2. 億首川流域の変遷	(岸本) 116
報告書抄録	120

図・写真・表目次

一図目次一

図1.1. 金武町内における墓群分布	1	図4.11. 宮城原地区 (⑥地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (3)	39
図1.2. 2017 (平成29) 年度工程実績	4	図4.12. M24号墓 (正面・平面・断面図各種)	43
図1.3. 2018 (平成30) 年度工程実績	5	図4.13. M44号墓 (正面・平面・断面図各種)	48
図1.4. 2019 (平成31・令和元) 年度工程実績	6	図4.14. M47号墓 (正面・平面・断面図各種)	50
図1.5. 2020 (令和2) 年度工程実績	7	図4.15. 田慶志原地区 遺構範囲図	61
図2.1. 沖縄島及び金武町の位置	8	図4.16. 田慶志原地区 遺構位置図	62
図2.2. 金武町域	9	図4.17. 田慶志原地区 (①地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (1)	63
図2.3. 金武町地形断面図	10	図4.18. 田慶志原地区 (①地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (2)	64
図2.4. 表層地質図 (金武町東部・億首川周辺)	10	図4.19. 飛留喜田原地区 遺構範囲図	72
図2.5. 地形分類図 (金武町東部・億首川周辺)	10	図4.20. 飛留喜田原地区 遺構位置図	73
図2.6. 金武町域内の埋蔵文化財 (遺跡地図)	11	図4.21. 飛留喜田原地区 (①地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (1)	74
図2.7. 金武町域内の範囲変遷	12	図4.22. 飛留喜田原地区 (②地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (2)	75
図2.8. 金武町における村落の変遷	12	図4.23. 飛留喜田原地区 (③地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (3)	76
図3.1. 金武町東部の地形及び億首川下流域一帯の 民俗地名 (古地名)	15	図4.24. H01号墓 (正面・平面・断面図各種)	78
図3.2. 億首川流域古墓群及び周辺遺跡・ グリッド図	16	図4.25. H28号墓 (正面・平面・断面図各種)	85
図3.3. 地籍図及び遺構位置図	17	図4.26. 頭呂地原地区 遺構範囲図	90
図3.4. 間切図及び遺構位置図	18	図4.27. 頭呂地原地区 遺構位置図	91
図3.5. 米軍空撮写真及び遺構位置図	19	図4.28. 頭呂地原地区 (②地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図	92
図3.6. 表層地質図及び遺構位置図	20	図4.29. S23号遺構 配置図 (平面図・断面図)	95
図3.7. 地形分類図及び遺構位置図	21	図4.30. S23号遺構 略測図 (平面図・断面図・立面図)	95
図3.8. 古墳の分類	22	図4.31. 億首川右岸 垂直遺構分布図	100
図3.9. 陶製専用蔵骨器 (厨子甕) 分類	23	図4.32. 億首川左岸 垂直遺構分布図	102
図4.1. 悉皆分布調査範囲 空中写真及び遺構位置図	24	図4.33. 出土遺物 (1)	105
図4.2. 悉皆分布調査範囲 地形図及び遺構位置図	26	図4.34. 出土遺物 (2)	106
図4.3. 甘喜原地区 遺構範囲図	28	図5.1. 墓前面構造模式図	110
図4.4. 甘喜原地区 遺構位置図	29	図5.2. 墓室床面形状模式図	110
図4.5. 甘喜原地区 (①地区) 遺構平面図・断面図 及び垂直見透遺構分布図	30	図6.1. M50号墓 (正面・平面・断面図各種)	115
図4.6. A01号墓 (正面・平面・断面図各種)	32	図6.2. 億首川の流路及び社会的変遷 (1)	117
図4.7. 宮城原地区 遺構範囲図	35	図6.3. 億首川の流路及び社会的変遷 (2)	117
図4.8. 宮城原地区 遺構位置図	36	図6.4. 億首川の流路及び社会的変遷 (3)	118
図4.9. 宮城原地区 (②地区) 遺構平面図・断面図 及び垂直見透遺構分布図 (1)	37	図6.5. 億首川の流路及び社会的変遷 (4)	118
図4.10. 宮城原地区 (③地区) 遺構平面図・ 断面図及び垂直見透遺構分布図 (2)	38		

一写真目次一

巻頭図版1. 億首川流域模型写真	i	写真4. 28. T36号墓	68
巻頭図版1. 億首川流域鳥瞰図 (3Dモデル)	ii	写真4. 29. 飛留喜田原地区遠景 (南西より)	72
巻頭図版2. 調査地遠景 (2018年12月6日撮影)	iii	写真4. 30. H01号墓	77
巻頭図版3. A01号墓 (岩陰掘込墓)・ H28号墓 (岩陰石積墓)	v	写真4. 31. H02号墓	79
巻頭図版4. M24号墓 (岩陰掘込墓)・ M50号墓 (掘込墓)	vi	写真4. 32. H03号墓	80
巻頭図版5. M47号墓 (掘込墓)・H01号墓 (仮墓)	vii	写真4. 33. H08号墓	81
写真1. 1. 悉皆分布調査 (平成29年度)	5	写真4. 34. H12号墓	82
写真1. 2. 悉皆分布調査 (平成30年度)	6	写真4. 35. H19号墓	83
写真1. 3. 悉皆分布調査 (平成31・令和元年度)	7	写真4. 36. H27号墓	83
写真1. 4. 古墓実測及び資料整理等作業 (令和2年度)	8	写真4. 37. H28号墓	84
写真4. 1. 甘喜原地区遠景 (東より)	28	写真4. 38. H38号墓	86
写真4. 2. A01号墓 (1)	31	写真4. 39. 頭呂地原地区遠景 (南西より)	90
写真4. 3. A01号墓 (2)	33	写真4. 40. 頭呂地原地区近景 (南より)	90
写真4. 4. A04号墓	33	写真4. 41. S05号墓	93
写真4. 5. 宮城原地区遠景 (東より)	35	写真4. 42. S20号墓	94
写真4. 6. M08号墓	40	写真4. 43. S23号遺構	94
写真4. 7. M12号墓	41	写真4. 44. A16・M91号遺構	97
写真4. 8. M13号墓	42	写真4. 45. M92・M93号遺構	98
写真4. 9. M24号墓	42	写真4. 46. H53号遺構	99
写真4. 10. M27号墓	44	写真4. 47. その他の遺構	104
写真4. 11. M34号墓	45	写真4. 48. 遺物	107
写真4. 12. M35号墓	45	写真6. 1. M50号墓	114
写真4. 13. M40号墓	46	写真6. 2. 億首川河口付近から上流を望む	116
写真4. 14. M41号墓	47	写真6. 3. 下流側から金武ダム堤体を望む	116
写真4. 15. M44号墓	47	写真6. 4. 億首川流域に架かる主な橋梁	119
写真4. 16. M47号墓	49		
写真4. 17. M54号墓	51		
写真4. 18. M61号墓	52		
写真4. 19. M76号墓	53		
写真4. 20. M78号墓	53		
写真4. 21. M86号墓	54		
写真4. 22. 田慶志原地区遠景 (南東より)	61		
写真4. 23. 田慶志原地区近景 (北東より)	61		
写真4. 24. T03号墓	65		
写真4. 25. T06号墓	66		
写真4. 26. T20号墓	67		
写真4. 27. T34号墓	68		

一表目次一

表4. 1. A01号墓 遺構観察表	31
表4. 2. A04号墓 遺構観察表	33
表4. 3. 甘喜原地区 遺構一覧表	34
表4. 4. M08号墓 遺構観察表	40
表4. 5. M12号墓 遺構観察表	41
表4. 6. M13号墓 遺構観察表	41
表4. 7. M24号墓 遺構観察表	42
表4. 8. M27号墓 遺構観察表	44
表4. 9. M34号墓 遺構観察表	45
表4. 10. M35号墓 遺構観察表	45
表4. 11. M40号墓 遺構観察表	46
表4. 12. M41号墓 遺構観察表	46
表4. 13. M44号墓 遺構観察表	47
表4. 14. M47号墓 遺構観察表	49
表4. 15. M54号墓 遺構観察表	51

表4.16. M61号墓 遺構観察表	52	表6.1. M50号墓 遺構観察表	114
表4.17. M76号墓 遺構観察表	52		
表4.18. M78号墓 遺構観察表	53		
表4.19. M86号墓 遺構観察表	54		
表4.20. 宮城原地区 遺構一覧表 (1)	55		
表4.21. 宮城原地区 遺構一覧表 (2)	56		
表4.22. 宮城原地区 遺構一覧表 (3)	57		
表4.23. 宮城原地区 遺構一覧表 (4)	58		
表4.24. 宮城原地区 遺構一覧表 (5)	59		
表4.25. 宮城原地区 遺構一覧表 (6)	60		
表4.26. T03号墓 遺構観察表	65		
表4.27. T06号墓 遺構観察表	66		
表4.28. T20号墓 遺構観察表	67		
表4.29. T34号墓 遺構観察表	67		
表4.30. T36号墓 遺構観察表	68		
表4.31. 田慶志原地区 遺構一覧表 (1)	69		
表4.32. 田慶志原地区 遺構一覧表 (2)	70		
表4.33. 田慶志原地区 遺構一覧表 (3)	71		
表4.34. H01号墓 遺構観察表	77		
表4.35. H02号墓 遺構観察表	79		
表4.36. H03号墓 遺構観察表	80		
表4.37. H08号墓 遺構観察表	81		
表4.38. H12号墓 遺構観察表	82		
表4.39. H19号墓 遺構観察表	83		
表4.40. H27号墓 遺構観察表	83		
表4.41. H28号墓 遺構観察表	84		
表4.42. H38号墓 遺構観察表	86		
表4.43. 飛留喜田原地区 遺構一覧表 (1)	87		
表4.44. 飛留喜田原地区 遺構一覧表 (2)	88		
表4.45. 飛留喜田原地区 遺構一覧表 (3)	89		
表4.46. S05号墓 遺構観察表	93		
表4.47. S20号墓 遺構観察表	93		
表4.48. S23号遺構 遺構観察表	94		
表4.49. 頭呂地原地区 遺構一覧表 (1)	95		
表4.50. 頭呂地原地区 遺構一覧表 (2)	96		
表4.51. 遺物観察表	107		
表5.1. 各地区の墓遺構分類集計	108		
表5.2. 標高値毎の古墓の分布及び古墓種別の割合	109		
表5.3. 古墓前面構造の類別	110		
表5.4. 古墓床面形状の類別	111		
表5.5. 各地区の蔵骨器分類別出土傾向	111		

第1章 調査の目的と経過

第1節 調査に到る経緯

当町域内における埋蔵文化財の分布情報（遺跡地図）は、昭和57（1982）年度^{*1}、昭和63～平成元（1988～89）年度^{*2}の調査成果を基礎としている。平成2（1990）年3月刊行の遺跡詳細分布調査報告では先史古代（沖縄貝塚時代）から古くは縄文時代、近世琉球まで計28ヶ所の遺跡（遺物散布地を含む）を掲載している。なかでも億首川周辺は、先史時代から古くは縄文時代初期にかけての遺物が採集された遺跡や遺物散布地が複数分布する地域でもある。

当町教育委員会では、平成18（2006）年度から文化庁国庫補助を受けて、過去踏査により設定された「周知の遺跡」の実際の把握とともに、ダム再開事業や在沖米軍施設の返還跡地利用などの各開発区域を対象とする埋蔵文化財予備調査を順次実施してきた^{*3}。この一連の予備調査によって、かつての予備調査（1982年踏査及び1989～90年踏査）による遺跡情報を補遺するとともに、未調査エリアであった億首川上流域や米軍施設内における埋蔵文化財の分布状況を把握することができた。これまでに億首川上流域生産遺跡群や奥首の交通遺跡群、ギンバルの石灰窯跡群など、近世から近現代における生産遺跡・交通遺跡・古窯等が億首川周辺において新たに確認されており、平成31（2019）年度時点で町内の埋蔵文化財は36カ所を数える。

金武・並里集落が立地する石灰岩台地の東縁にあたり、町葬斎場や宮城原霊園が立地する億首川下流右岸の丘陵斜面地一帯には、露頭する石灰岩岩盤を利用した岩陰墓や掘込墓の墓群が数多く存在する。当該場所は、地元の古老が「ナグスク」、「ミーチェ」の地名で口碑に伝える、古くからある墓域でもある（図1.1）^{*4}。平成18（2006）年度以降の予備調査では、左岸も含む億首川周辺の複数地点においても古墓群を確認していることから、億首川下流右岸（ナグスク・ミーチェ地区）の墓域を中心として億首川下流域の比較的広い範囲に近世以来の墓群が

存在すると推測される。当町教育委員会ではこれらの墓群を包括して「億首川流域古墓群」と呼称している。しかし、時代の推移とともに墓域に関する口碑情報も字誌等の資料にわずかに認める程度で、下流一帯の土地改良事業等による土地改変や景観変化もあり、墓群周辺の地権者には古墓の存在を知らない者も少なくない。平成25・26（2013・14）年度には国道バイパス道路建設に伴う埋蔵文化財照会で岩陰墓・掘込墓など20数基の古墓を確認、発掘調査による記録保存をおこなっている^{*5}。

当町教育委員会では、億首川周辺における今後の公共・民間開発との諸調整、埋蔵文化財の適切な保護を期するため、億首川流域古墓群の実態把握を目的とした悉皆分布調査を計画し、平成29（2017）年度から文化庁国庫補助による町内遺跡発掘調査等の一環で調査に着手した。



図1.1 金武町内における墓群分布

*1 多和田眞洋が「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」（1960年）で金武洞穴遺跡を紹介したのが最初で（多和田1960）、1970年代まで町内遺跡数は10に満たなかったが、昭和57（1982）年度に沖縄貝塚時代考古学研究会が金武町遺跡分布調査を依頼し、28ヶ所の遺跡や遺物散布地が『金武町遺跡概要書』で報告されている（金武町教育委員会編1982）。

*2 金武町教育委員会編1990『金武町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告—』（金武町文化財調査報告書第1集）。

*3 金武町教育委員会編2010『町内埋蔵文化財予備調査報告書—億首川周辺（平成18～20年度）—』（金武町の歴史と文化第4集）。

*4 金武町教育委員会編2018『町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅱ 平成21～27年度町内遺跡発掘調査等—億首川下流周辺・ギンバル訓練場跡地内埋蔵文化財予備調査Ⅱ—』（金武町の歴史と文化第7集）。

*5 金武区誌編集委員会編1994『金武区誌 戦前編』（上・下巻）金武区事務所などの字誌資料をもとに作成（金武町教育委員会編2019所収）。

*6 S 形の可能性が示唆される古墳27基を対象に発掘調査をおこない、確実に確認できたのは113基である。金武町教育委員会編2019『ミーチェの古墓群—国道329号金武バイパス（2工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（金武町の歴史と文化第8集）。

第2節 調査体制

金武町教育委員会が事業主体（事業所管：社会教育課）となり、文化庁及び沖縄県教育委員会の助言を得ながら調査を実施した。各年度の調査体制は、下記のとおりである。

平成29（2017）年度

事業主体 金武町教育委員会
 事業責任者 教育長 比嘉貴一
 事業総括 社会教育課長 新里朝治
 社会教育課主幹 仲間 功
 事業事務・調査担当者
 社会教育係長 安座間充
 調査補助員 文化財調査嘱託員 玉城奈緒
 資料整理作業員 屋比久美香子
 （委託業務）
 委託業務名 町内埋蔵文化財予備調査支援業務委託（地形測量・分布図作成）

受託者

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店
 主任調査員 青木翔太郎
 土木施工管理 藤崎伸一郎
 調査補助員 知花一正／橋本厚司／萩原 尚
 発掘調査作業員 喜如嘉朝弘／喜屋武志保
 資料整理作業員 喜如嘉朝弘／喜屋武志保

平成30（2018）年度

事業主体 金武町教育委員会
 事業責任者 教育長 比嘉貴一
 事業総括 社会教育課長 新里朝治
 社会教育課長補佐 仲間 功
 事業事務・調査担当者
 社会教育係長 安座間充
 調査補助員 文化財調査嘱託員 玉城奈緒
 資料整理作業員 屋比久美香子
 （委託業務）
 委託業務名 町内埋蔵文化財予備調査支援業務委託（地形測量・古壙等分布図作成）

受託者

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店
 主任調査員 小石龍信
 調査員 青木翔太郎
 調査補助員 高橋 亨
 発掘調査作業員 岸本邦彦／中村克也／松本太郎
 資料整理作業員 藤田 泉／松本太郎／山形映月

平成31・令和元（2019）年度

事業主体 金武町教育委員会
 事業責任者 教育長 比嘉貴一
 事業総括 社会教育課長 仲間 功
 社会教育課長補佐 末吉 豪
 事業事務・調査担当者
 社会教育係長 安座間充
 調査補助員 文化財調査嘱託員 仲本祥太
 資料整理作業員 屋比久美香子
 （委託業務）
 委託業務名 町内埋蔵文化財予備調査支援業務委託（地形測量・古壙等分布図作成）

受託者

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店
 主任調査員 平島義孝
 調査員 立石和也
 調査補助員 青木翔太郎／高橋 亨
 発掘調査作業員 加島 治／岸本邦彦／中村克也
 資料整理作業員 藤田 泉／山形映月

令和2（2020）年度

事業主体 金武町教育委員会
 事業責任者 教育長 比嘉貴一
 事業総括 社会教育課長 仲間 功
 社会教育課長補佐 末吉 豪
 事業事務 社会教育係長 山城 平
 調査担当（整理・報告書作成） 岸本卓己
 仲本祥太
 資料整理 屋比久美香子
 資料整理・報告書作成等協力
 総務課課長補佐（社会教育課併任）安座間充
 玉元孝治／川島 淳／安富祖宴／玉城菜美路

(委託業務)

委託業務名

町内埋蔵文化財予備調査支援業務委託(資料整理)

受託者

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店

主任調査員 平島義孝

調査員 青木翔太郎/高橋 亨

発掘調査作業員 上原尚樹/喜屋武志保/
吉田健一郎

資料整理作業員 石原恵琳/喜屋武志保/
山形咲月/吉田健一郎

(委託業務)

委託業務名

町内埋蔵文化財予備調査支援業務委託(報告書作成)

受託者

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店

主任調査員 平島義孝

調査員 青木翔太郎/高橋 亨

発掘調査作業員 上原尚樹/喜屋武志保/
吉田健一郎

資料整理作業員 石原恵琳/喜屋武志保/
山形咲月/吉田健一郎

調査指導・調査協力

調査指導及び調査協力者は下記のとおり。(順不同・敬称省略/所属等は当時)

綱垣田佳男(文化庁文化財部記念物課)

宮城淳一(沖縄県教育庁文化財課)

赤嶺政信(琉球大学人文社会学部・金武町史編さん専門委員/民俗学)

崎原恒新(金武町史編さん委員/民俗学)

仲原弘哲(元今帰仁村歴史文化センター/民俗学)

土肥直美(元琉球大学医学部/形質人類学)

宮城弘樹(沖縄国際大学総合文化学部/考古学)

田里一寿(宜野座村教育委員会)

仲間文江(元金武町教育委員会)

崎原恒寿(恩納村教育委員会)

安座間奈緒(株式会社文化財サービス沖縄営業所)

山口洋子(有限会社MUI景画)

内閣府沖縄総合事務局北部ダム統合管理事務所

沖縄県公文書館・公益財団法人沖縄文化振興会

並里区事務所・並里財産管理会

中川区事務所

喜瀬武原公民館

アンデス農園(伊藝裕美子)

金武町役場産業振興課・住民生活課

第3節 調査経過

平成29（2017）年度から調査を開始した。億首川流域古墓群は億首川下流兩岸に広がる石灰岩丘陵斜面地の広範囲に及ぶため、複数年度の計画で悉皆分布調査を実施することとした。悉皆分布調査は、原則として樹木伐採を伴わない踏査による古墓その他人為的な構造物の確認作業及び詳細地形測量を中心とした。以下、事業実績報告をもとに年次別の調査経過を記述する。

平成29（2017）年度

調査体制

調査員 金武町教育委員会 社会教育課職員（社会教育係長）を充てた。

補助員 文化財調査嘱託員1名を充てた。（延べ日数161.0人/日）

作業員 賃金職員1名を充てた。（延べ日数135.0人/日）

民間発掘調査組織による調査支援業務委託（地形測量・分布図作成）



図1.2. 平成29（2017）年度工程実績

調査概要

調査初年にあたる当該年度は、平成21～27（2009～2015）年度の町内遺跡発掘調査等で実施した、億首川下流周辺の「周知の遺跡」（過去踏査で先史時代遺物が採集された地点周辺）、米軍施設返還跡地（ギンバル訓練場跡地）における埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）の報告書作成と並行しながら、億首川流域古墓群の悉皆分布調査に着手した。当該年度は、当古墓群でも最大規模の墓域と推定される下流右岸のナークスク・ミーチェ地区（小字宮城原・田慶志原地区）、約27,200㎡を対象に調査を実施した。対象地内の地権者説明を終え、梅雨明け後の同年6月30日から現地調査に着手した。現地踏査により右岸地区では埋没墓や墓跡の可能性のある箇所も含めて100以上の古墓を確認した。また、当初の測量予定になかったが、踏査での地形観察及び古墓の分布状況から、ナークスク・ミーチェ地区の丘陵地形の特徴及び造墓状況等の利用実態が窺える地点を選び、地形断面図も追加作成した。現地調査は翌年3月上旬に終え、当該年度の事業を3月30日に終了した。



001. 測量作業 002. 記録作業

写真1.1. 悉皆分布調査（平成29年度）

平成30（2018）年度

調査体制

調査員 金武町教育委員会 社会教育課職員（社会教育係長）を充てた。

補助員 文化財調査嘱託員1名を充てた。（延べ日数175.0人/日）

作業員 賃金職員1名を充てた。（延べ日数149.0人/日）

民間発掘調査組織による調査支援業務委託（地形測量・分布図作成）

調査概要

前年度につづき、当該年度は億首川下流左岸地区（小字飛留喜田原・頭呂地原地区）の約21,000㎡を対象とした。同年6月29日から現地調査に着手、（埋没墓や墓跡の可能性のある箇所も含めて）60余の古墓を確認した。地元の伝承にある1609年の島津侵攻時に活躍した鉄人「ギミンノヘイカ」の墓と伝わる古墓（H01号墓）が飛留喜田原地区にあり、その詳細観察もおこなった。左岸地区においても右岸と



図1.3. 平成30（2018）年度工程実績

同様に踏査成果を踏まえて2地点で地形断面図を作成した。翌年2月下旬までに地形測量等の現地作業を終了、調査記録の整理等をおこない、3月29日に当該年度の事業を終了した。



003. 伐採作業
004. H01号墓 記録作業
005. 観察記録カード作成

写真1.2. 悉皆分布調査（平成30年度）

平成31・令和元（2019）年度

調査体制

調査員 金武町教育委員会 社会教育課職員（社会教育係長）を充てた。

補助員 文化財調査嘱託員1名を充てた。（延べ日数82.0人/日）

作業員 賃金職員1名を充てた。（延べ日数80.0人/日）

民間発掘調査組織による調査支援業務委託（地形測量・分布図作成）

調査概要

平成29年度（2017）年度の踏査でカバーできなかった国道329号線（金武大橋）以北を含む右岸地区北側（小字甘喜原～宮城原）約10,000㎡を対象に、令和元年5月29日から当該年度の調査に着手した。その後、踏査及び測量の対象範囲増減（2,100㎡）を追加があり、右岸北地区では墓跡と思しき箇所も含めて計23基の古墓を確認した。過去にダム再開発事業に伴う埋蔵文化財予備調査で確認していた古墓



図1.4. 平成31・令和元（2019）年度工程実績

（A01号墓など）も含まれる。平成29（2017）年度から継続してきた億首川流域古墓群の実際の把握を目的とした悉皆分布調査は、当該年度で所期の目的であった対象区域内の踏査を終えたことになる。地形測量等も含む現地作業は同年9月末までに終了した。10月以降は、嘉手鉾町以南の米軍施設再編計画に係る施設移設計画地の埋蔵文化財予備調査と並行しながら過年度分も含む調査記録の整理作業をおこない、翌年3月31日、当該年度の事業を終了した。



006. 打ち合わせ状況
 007. 現地踏査
 008. 遺構観察・記録状況

写真1.3. 悉皆分布調査（平成31・令和元年度）

令和2（2020）年度

調査体制

調査員 金武町教育委員会 会計年度任用職員（文化財担当）2名を充てた。

作業員 会計年度職員1名を充てた。（延べ日数36.0人/日）

民間発掘調査組織による資料整理業務委託（遺構実測等）、報告書作成支援業務委託

調査概要

当該年度業務は令和2年4月1日に着手した。平成29～平成31（令和元）年度の調査で回収した遺物の資料整理（遺物実測・デジタルトレース及び写真撮影）を教育委員会直営で実施した。7月末からは3ヶ年の悉皆分布調査で確認された古墓群から残存状況が良好な墓遺構（A01号墓など）を対象に、写真測量などをおこなった。10月からはオルソ画像をもとに遺構実測及びトレース図化作業を教育委員会直営及び委託で実施した。

11月には億首川下流左岸の法面工事に伴い、不時



図1.5. 令和2（2020）年度工程実績

発見された埋蔵文化財予備調査（古墓など）への対応にあたり令和3年1月から報告書作成に係る原稿執筆、レイアウトなどの諸工程の作業を本格化させた。



009. オルソ作成に伴う写真撮影
010. オルソ作成作業
011. 成果品検査

写真1.4. 古墓実測及び資料整理等作業（令和2年度）

や田芋栽培、泡盛酒造など本町の特産品として広く知られ、近年では、熱帯果実（マンゴー）、ぶなしめじ、養鰻なども町特産品として市場での認知度も高まりつつある。商業・観光業分野ではタコライス発祥の町として、近年は億首川周辺の田園風景や自然資源を活用した体験型観光や基地跡地の再開発による医療ツーリズム、スポーツ・ツーリズムを推進している。また、

本町は「沖縄海外移民の父」當山久三やフィリピン移民で活躍した大城孝蔵の出身地であり、県下でも海外移民を多数輩出した「海外雄飛の里」として知られている。現在、本町では『第5次金武町総合計画』（平成28～平成37（令和7）年度）を基軸に「みんなで築く夢と希望を持てるまち」を目指して、各分野の諸施策が推進しているところである。

第2節 金武町の地理的環境・自然的環境

気 候 沖縄県の気候の特徴は、年平均気温が22℃以上と暖かく、年降水量も2000mmを超え、湿度が年間を通して高く、亜熱帯海洋性気候に属している。本町の過去10年間の気象状況（沖縄気象台観測）をみると、年間平均気温が22.6℃、年平均降水量は1919mmとなっている。

地 形 本町の地形は、山地・丘陵が大部分を占める一方、琉球石灰岩の台地も発達した特徴をあわせもっている。町域北方は、恩納村と背接し、その接点には脊梁山地中のティーチュ岳（177m）、ブートゥ岳（214m）、ジャフン岳（250m）、恩納岳（363m）、屋嘉岳（202m）、石川岳（208

m）の山々が東西に連なる。それらの山々から南方の金武湾（太平洋）に向かって小起伏や緩やかな丘陵が広がり海岸低地に続いている。また、山々を源にする大小10余りの河川が海岸線に向かって流れ、谷筋を形成して地形に変化を与えている。町域東半部では、琉球石灰岩が発達し、町人口の6割以上を擁する金武・並里集落が台地上に立地する。西半部の伊芸・屋嘉区では、海岸線近くまで丘陵が迫り集落は丘陵裾付近の低地部に立地している。

表層地質 本町の表層地質は、古い時代の地質で構成されるため谷が発達し山々の傾斜は大きいといえる。脊梁山地部は、中生代後期から新生代前期の堆積物である国頭群群名護層（固結砂岩、粘板岩



図2.2. 金武町域

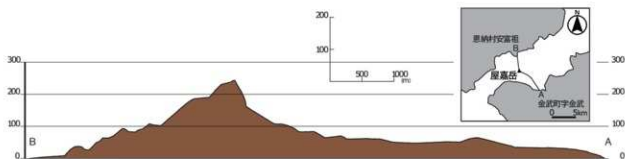


図2.3. 金武町地形断面図

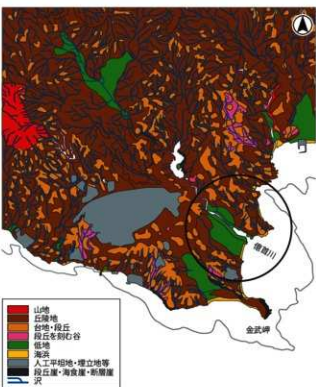
等）・嘉陽層（固結千枚岩、粘板岩等）が地形の基盤となっている。町西域の丘陵部から低地部および町東域では、新生代後期の堆積物である国頭礫層（未固結非石灰岩、段丘堆積物等）と琉球石灰岩（未固結、固結石灰質堆積物等）で構成される段丘面が不整合に発達する。土壌は、本町域を構成する岩石（千枚岩、砂岩等）が風化した赤土、いわゆる国頭マージが大部分を占め、金武・並里や中川の一帯では島尻マージ（赤土）が分布する。また、町域の低地部には、海浜堆積物を主とする沖積層が分布する。

現存植生 本町の森林総面積は20.21km²あり、民有林面積は20.21km²、区域面積に占める森林率は65.3%となっている。町域の森林環境を構成する植

生は地域や地質の状況に応じて多様化している^{*1}。山地・丘陵は、常緑広葉樹のボチョウジイジュ群落や常緑針葉樹のリュウキュウマツ群落が大部分を占める一方、ジャブン岳やブートウ岳などの裾野にはナガバカニクスサスキ群団が広がる。集落近傍は常緑広葉樹のナガミボチョウジヤブニッケイ群落、琉球石灰岩地域では落葉広葉樹のハドノキウラジロエノキ群団などがみられる。海岸付近ではモクマオウ類植林やアダン群団が優占する。億首川の河口域にはヤエヤマヒルギ・オヒルギ・メヒルギを主体に、ヒルギモドキ（北限種）が自生し、貴重なマングローブ群落が発達し^{*2}、環境省の「日本の重要湿地」として指定されている。



上図は、「1/50,000土地分類基本調査(表層地質)「金武・沖縄市北部」
沖縄県 1992年 を一部抜粋し、改変・トレース



上図は、「1/50,000土地分類基本調査(地形分類)「金武・沖縄市北部」
沖縄県 1992年 を一部抜粋し、改変・トレース

図2.4. 表層地質図（金武町東部・億首川周辺）

図2.5. 地形分類図（金武町東部・億首川周辺）

*1 金武町役場『金武町森林整備計画』2019年

*2 金武町教育委員会編『金武町億首川マングローブ調査報告書』1993年

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

先史時代 本町域内においては、これまで30余りの埋蔵文化財が確認されている（図2.6）。本町で最古の資料は、億首川河口付近の西先謝原遺物散布地で、約5,000年前の縄文時代前期（沖縄貝塚時代前期）の条痕文土器である。億首川下流周辺には飛留喜田原A遺跡や頭呂地原遺物散布地など縄文時代後・晩期（沖縄貝塚時代前・中期）、弥生～平安並行時代（沖縄貝塚時代後期）、グスク時代初期など各時期所産の遺物が確認されており、当該地域が集落適地として選択され続けたことが窺える。また、これらの遺物散布地は海岸線に程近い沖積低地や台地縁辺部に所在しており、県内の遺跡分布にみる模式的な立地状況が億首川周辺で窺える。しかし、各遺跡の帰属時期推定の根拠となる土器等の遺物は、採集または二次堆積層（崩積層）からの出土が大半で、貝塚や住居・埋葬施設等の遺構検出例に

は、いまだ恵まれていない。

グスク時代・古琉球 10～11世紀頃の貝塚時代後期の終末段階の沖縄島の人々は漁撈採集を中心とした食糧生産獲得経済から農耕の本格的開始による食糧生産経済に移行する。本町域でも、資源供給地であるサンゴ礁環境に近い海岸線付近から離れ、未開拓地の内陸部に生活営為の拠点を移したとされる。現在の集落に近い金武鍾乳洞遺跡から、グスク時代初期の土器や中国産陶磁器などが採集されており、他の遺跡・遺物散布地でも中国産輸入陶磁器（宋代白磁玉鉢碗など）、カムイヤキ、滑石製石鍋といったグスク時代でも比較的古手な時期の船載容器類を採集している。

13～14世紀頃になると沖縄島各地に有力支配者が登場し各地で大型城塞のグスクが築かれるようになった。本町域で内陸部の開発や集落の展開、支配者の出現があったものと思われる。当時期に金武グ

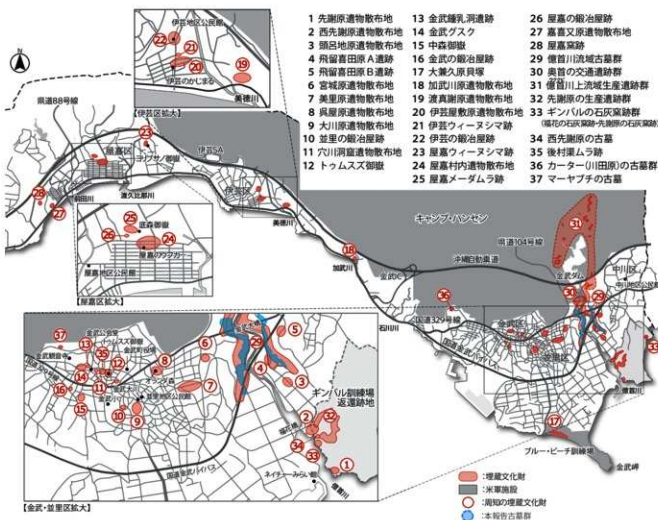


図2.6. 金武町域内の埋蔵文化財（遺跡地図）

*1 沖縄島の先史時代区分名称については、『新沖縄県史 各論編第二巻 考古』における「沖縄県史考古編年表（沖縄諸島）」に準拠した。

スクでの按司の居住は未確認だが「おもしろし」に「きんのよぬし（金武の世の主）」の名が登場する。「金武」の地名がいつ発生したか定かではないが現在確認できる文字資料では「玉陵碑文」（1501年）に尚真王第6男尚享仁が「きんのあんし」と記されており、この時点で金武間切は創設されていたと考えられる。また、恩納ノロ辞令書（1584年）には「きんまきり（金武間切）」の記載が確認できる。当時の金武間切は現在の恩名村の名嘉間以北から名護市久志・辺野古までを含む広範囲の領域であった（図2.7.上段）。

近世琉球 1609年に島津氏の琉球侵攻後は「地頭制」と呼ばれる地方行政制度が創設された。間切全体を所領する立場の「両総地頭」（按司地頭と惣地頭）と、間切内村を領する脇地頭は首里・那覇に居住し、王府が各間切・島の基本的な統治を担う一方で、間切行政は間切と村の役人によって遂行された。また、島津侵攻後に「間切・シマ制度」は「間切・村制度」に改編された。行政区分としての「シマ」は「村」（現在の字に相当）に変化した。1646年編製の『絵図郷村帳』によると、金武間切は、金

武村・いげ村・屋賀村・おんな村・せらかち村・あふそ村・中間村・へのき村・くし村・こちや村・ぎのざ村・そうけ村・かんな村で構成された。他方、はま村・つぶた村（慶武田村）・平田村・前田村の名前が確認できるがすでに両村は存在していなかった。17世紀半頃に間切分割とよばれる行政区画が再編され1673年に恩納間切と久志間切が新設された。これに伴い金武間切の恩納・瀬良垣・安富祖・名嘉真の四村が恩納間切に、久志と辺野古の二村が久志間切に編入され、金武間切の領域は縮小した（図2.7.下段）。1737年以降に首里王府（蔡温）は山林政策を確立し「袖山方式帳」や「山奉行規模帳」などの令達による管理方法などの基本方針を定めて管理体制を確立した。億首川流域では、並里の人々は首里王府・間切番所の指導で山養生（造林撫育）の仕事に携わり、袖山から切り出された薪炭材等の林産物は山原船で運ばれて本島中南部の泡瀬・与那原などで売られた。戦前期まで林産物は農産物と並び庶民の重要な収入源であり、集落や人々とヤマの関係は口碑にみる地域・場所の民俗地名（古地名）でも窺える。



図2.7. 金武間切域の範囲変遷

近世 変遷	1646年 （『絵図郷村帳』）	1669年 （『金武間切帳』）	1673年 （『恩納間切帳』）	1681年 （『久志間切帳』）	1695年 （『金武間切帳』）
金武・恩納・宜野座における村落の変遷	きん 金武村 金武村 つぶた村（当時無之） 並里 いげ村 いげ村 平田村（当時無之） や か 屋賀村 屋賀村 前田村（当時無之） かんな村 かんな村 はま村（当時無之） そうけ村 そうけ村 ぎのざ村 ぎのざ村 こちや村 こちや村 おんな村 恩納村 せらかち村 せらかち村 あふそ村 あふそ村 中間村 中間村 くし村 くし村 へのき村 へのき村	きん 金武村 金武村 つぶた村（当時無之） 並里 いげ村 いげ村 平田村（当時無之） や か 屋賀村 屋賀村 前田村（当時無之） かんな村 かんな村 はま村（当時無之） そうけ村 そうけ村 ぎのざ村 ぎのざ村 こちや村 こちや村 おんな村 恩納村 せらかち村 せらかち村 あふそ村 あふそ村 中間村 中間村 くし村 くし村 へのき村 へのき村	きん 金武村 金武村 つぶた村（当時無之） 並里 いげ村 いげ村 平田村（当時無之） や か 屋賀村 屋賀村 前田村（当時無之） かんな村 かんな村 はま村（当時無之） そうけ村 そうけ村 ぎのざ村 ぎのざ村 こちや村 こちや村 おんな村 恩納村 せらかち村 せらかち村 あふそ村 あふそ村 中間村 中間村 くし村 くし村 へのき村 へのき村	きん 金武村 金武村 つぶた村（当時無之） 並里 いげ村 いげ村 平田村（当時無之） や か 屋賀村 屋賀村 前田村（当時無之） かんな村 かんな村 はま村（当時無之） そうけ村 そうけ村 ぎのざ村 ぎのざ村 こちや村 こちや村 おんな村 恩納村 せらかち村 せらかち村 あふそ村 あふそ村 中間村 中間村 くし村 くし村 へのき村 へのき村	きん 金武村 金武村 つぶた村（当時無之） 並里 いげ村 いげ村 平田村（当時無之） や か 屋賀村 屋賀村 前田村（当時無之） かんな村 かんな村 はま村（当時無之） そうけ村 そうけ村 ぎのざ村 ぎのざ村 こちや村 こちや村 おんな村 恩納村 せらかち村 せらかち村 あふそ村 あふそ村 中間村 中間村 くし村 くし村 へのき村 へのき村
村数	13ヵ村（17ヵ村）	13ヵ村	7ヵ村	6ヵ村	6ヵ村

図2.8. 金武町における村落の変遷

近代沖繩 明治12(1879)年の琉球処分により沖縄県が設置されたが琉球王国時代の旧慣制度をそのまま継続させた。明治14(1881)年には、沖縄県になって2代目の県令にあたる上杉茂憲が沖縄島巡回の際に屋嘉・伊芸を経由して金武間切番所に宿泊し、億首川を渡って北上している。明治32(1899)年には、土地整理法の施行により地割制が廃止され土地が私有財産化されたことで、土地を売却し海外移民として渡航する人々もいた。明治41(1908)年には、沖縄県及島嶼町村制によって旧慣制度は刷新され、金武間切は金武村となり間切城内の各村は字に再編成された。明治32(1899)年には、本町出身(並里区)の當山久三が沖縄海外移民の先駆となる第1回ハワイ移民の送り出しに成功し、以後金武村は県下有数の移民村として栄えた。昭和13(1938)年には、県営開墾事業が開始され、中川に新集落が形成され、村当局は「中川区」を新設した。**沖縄戦～現代** 昭和20(1945)年の沖縄戦では、米軍の進攻により金武村にも少なからぬ影響を与えた。金武村を占領した米軍は金武・並里集落北側の広大な農地に「金武飛行場」を建設した。ほとん

の家屋は破壊され、屋敷には沖縄最大規模の日本軍捕虜収容所（屋敷捕虜収容所）が置かれた。本島北部東海岸地域には民間人収容所が集中的に置かれ、人口が急増した旧金武村東部の4字（漢那・宜野座惣慶・松田）は、終戦の翌年、昭和21（1946）年に宜野座村として分村した。また、戦前は並里区に帰属していた源原集落もこの年に中川区に編入された。昭和22（1947）年、米軍は旧金武飛工場周辺で射撃演習を開始した。昭和32（1957）年には飛行場跡地に兵舎（キャンプ・ハンセン）が建設され、海兵隊の移駐が開始される。ギンバル訓練場、ブルービーチ訓練場、レッドビーチ訓練場もこの時期に建設された。多くの村民が軍作業（基地建設工事）に従事するようになり、他地域からの人口流入も進んだ。純農村地域であった金武村の産業構造は一変し、第1ゲート前には米軍向け歓楽街・新開地が形成され賑わった。その後、基地関連産業の活性化や産業基盤の整備が進み、昭和55（1980）年に町制が施行され「金武町」となり、現在に至っている。

[illegible]

* 仲間文江氏が作成した村落の変遷表を一部改訂のうえ掲載した（元金武町教育委員会町史編さん係 編註職員）

第3章 遺跡の概要と調査方法

第1節 億首川流域古墓群の概要と調査方法

概要 金武町東部を流れる億首川には、「ウククビ(奥首)」の地名をもつ川幅が狭まり、上から見るとくびれた地形がある。この「ウククビ」から下流域兩岸の丘陵地の斜面および崖面では多くの古墓が確認されている。また、億首川下流域右岸の丘陵地には、古くから「ナグスク(宮城原)」「ミーチェ(田慶志原)」と呼ばれる墓域が存在する。現在も「ナグスク」「ミーチェ」の一带は、金武町宮城原遺跡として利用されている地区である(図3.1)。

過去の調査^{※1}では、比嘉原地区や宇武場原地区で岩陰墓を主体とした古墓が確認された。奥首原地区では「ヤマトンチュ墓」と呼ばれる岩陰墓の発掘調査をおこない、西先原地区では、亀甲墓に類似した石積み構築の墓跡(掘込屋根付墓)を図化記録した。平成25～26年度には国道329号金武バイパス建設事業に伴う田慶志原地区(ミーチェ地区)の発掘調査をおこない岩陰墓や掘込墓などの墓群が確認された。

本書は、平成29～平成31・令和元(2017～2019)年度に億首川下流域でおこなった埋蔵文化財予備調査の成果報告である。各年の調査地区は、平成29年度は並里区の宮城原地区・田慶志原地区(約28,000㎡)、平成30年度は中川区の飛留喜田原地区・頭呂地原地区(約21,000㎡)、平成31・令和元年度は並里区の甘喜原地区・宮城原地区(約12,000㎡)になり、2区5原を併せると総面積は約61,000㎡に及ぶ。

区割設定 調査区域には、遺構や遺物などの位置を詳細に記録するため調査区域にグリッドを設定した。座標は、国土座標系平面直角座標(第XV系)X=50,400、Y=43,900を始点に、東西×南北40mの区割りメッシュを設定し、南東隅を起点とした。グリッドの名称については、東西方向にアルファベット文字と南北方向に算用数字を配列して、区割番号(例「A1」「B1」…)を付した(図3.2)。

現地調査 埋蔵文化財予備調査は、はじめに予備踏査から実施した。踏査では、現状で目視できる埋蔵文化財を確認して、簡易測量(GIS機器)により位置情報を記録し、調査地区に分布する遺構の状況把握からおこなった。踏査終了後は、遺構周辺を含む範囲の樹木などの伐採および清掃作業を実施して、遺構の詳細踏

査(記録調査)をおこなった。

記録調査 確認された遺構は、西暦の下2桁の後に3桁の数字を組み合わせて通し番号を設定した(例2018年調査「18001」「18002」…)。また、各遺構には観察記録カードを作成して、遺構の種類、分類、立地、遺構の法量、遺物の有無、所見を記録した。詳細踏査で遺構の判別ができなかったものについては通し番号の記録に留めた。踏査で確認された遺物の取り扱いの原則、現地保存としたが、原位置から紛失する可能性があったものは位置情報を記録して取り上げをおこなった。位置情報についてはトータルステーション(測量機器)を用いて座標を記録した。古墓の位置情報は、墓口の両端を計測し、その中心点の座標を記録した。また、本調査と並行して、ドローンを用いた俯瞰撮影及び地形測量もおこなった。

資料整理 現地調査で確認した遺構の通し番号の再設定をおこない、新たに調査地区(小字名)のアルファベット頭文字を冠した連番を付した。設定例として、甘喜原地区の遺構であれば「A01」とし、遺構が古墓であれば「A01号墓」、その他の遺構であれば「A01号遺構」として種別した。遺構の実測については、確認した遺構のなかから特徴的および残存状況が比較的良好な古墓6基を選定して、写真測量(オルソ画像)を基に、平面図・立面図・断面見透図の図化をおこなった。

併用図資料 調査区域における基礎情報として各分野の地図資料や航空写真に億首川流域で確認された古墓群の位置を重ね合わせて試作した。以下、併用図から得られた情報を記す。

(1) 現在の地籍図に古墓の位置を照合した。図上では、古墓は複数の区画を跨ぐように分布している。但し、古墓が集中した箇所で見通す一区画内に納まった様相も垣間見ることができた。また、「ナグスク」「ミーチェ」と呼ばれる墓域は、丘陵地の斜面や崖地から台地上の縁辺部に広がっていた(図3.3)。

(2) 1944年米軍撮影の空撮写真に古墓の位置を照合した。古墓群は金武・並里集落から離れ、丘陵の緑地帯に分布している。現在と比較すると、立地環境が変わりは見られない。また、億首川下流域の土地利用も主に耕作地となっている。金武ダムや金武バイパス建設のような大きな改変行為は見られない(図3.5)。

※1 金武町教育委員会編『町内埋蔵文化財予備調査報告書—億首川周辺(平成18～20年度)—』(金武町の歴史と文化 第4集) 2010年
金武町教育委員会編『奥首の交通遺跡群—億首川流域古墓群比嘉原地区・幸地原の段地遺跡—』(金武町の歴史と文化 第5集) 2011年
金武町教育委員会編『町内埋蔵文化財予備調査報告書II—平成21～27年度 町内遺跡発掘調査等—』(金武町の歴史と文化 第7集) 2018年
金武町教育委員会編『ミーチェの古墓群—億首川流域古墓群ミーチェ地区—』(金武町の歴史と文化 第8集) 2019年

(3) 明治時代末期に作成された間切図に古墓の位置を照合した。古墓は億首川流域周辺の道沿い付近に集中する。また、踏査で確認された古道跡については図上の道と一致する状況が見られる一方、現在では確認できなかった道もみられる(図3.4)。

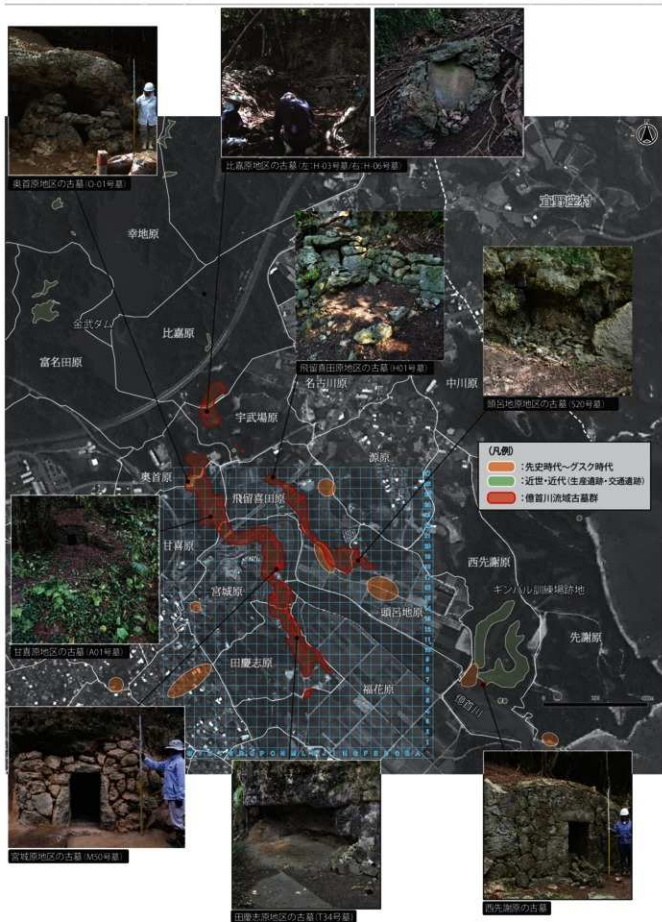
(4) 表層地質図および地形分類図に古墓の位置を照合した。古墓は主に億首川下流域から左岸側に形成され

る国頭礫層から沖積層と右岸側に形成される琉球石灰岩から嘉嘉層に分布している。ほぼ、確認された古墓全体が丘陵地に造営されていることが見られた(図3.6・図3.7)。



* 1954年米軍作成地形測量図を背景に使用。宇読資料(池原 1998: 並里の地名)を参考に作成。

図3.1. 金武町東部の地形及び億首川下流域一帯の民俗地名(古地名)



*1 各遺跡の範囲は、過去予備調査の成果等にもとづき推定範囲。
 *2 空撮写真 (平成23年3月撮影) を背景に使用。縮尺は任意である。

図3.2. 億首川流域古墓群及び周辺遺跡・グリッド図

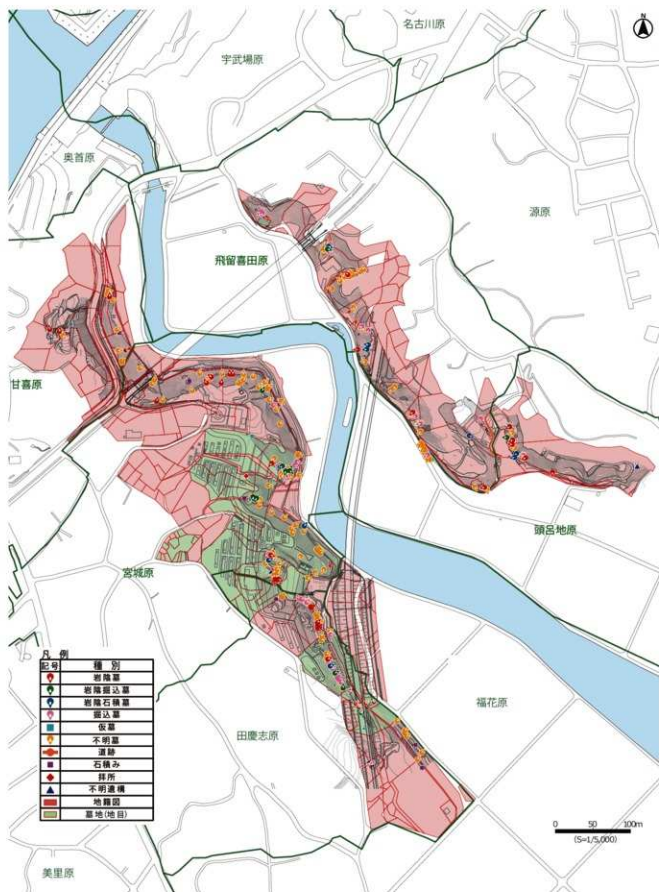
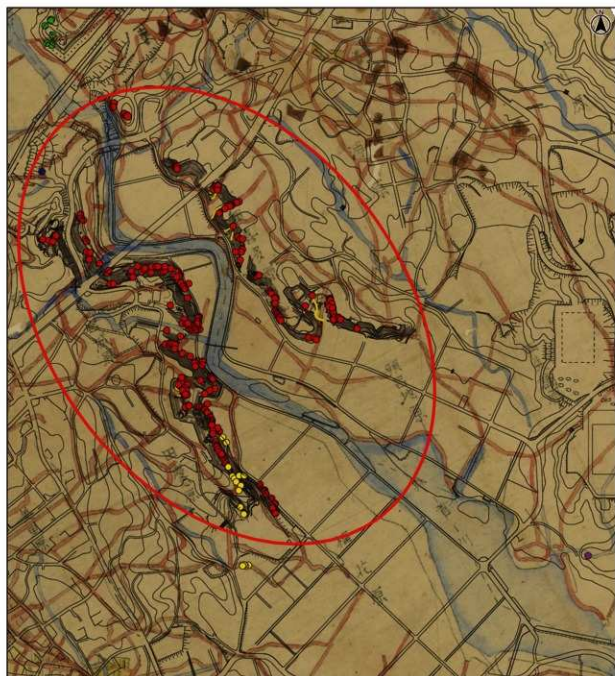


図3.3. 地籍図及び遺構位置図

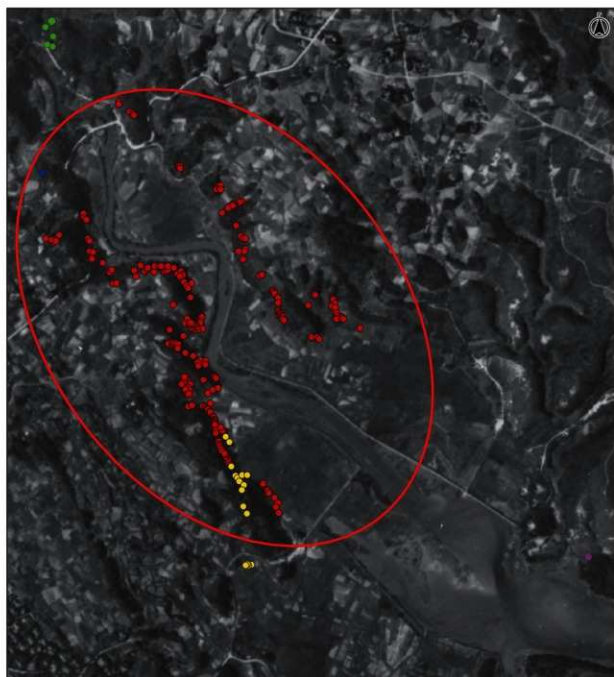


※金武町教育委員会所蔵 間切図（明治時代末期作成）を背景に作成。



0 200m
(S=1/8,000)

図3.4. 間切図及び遺構位置図



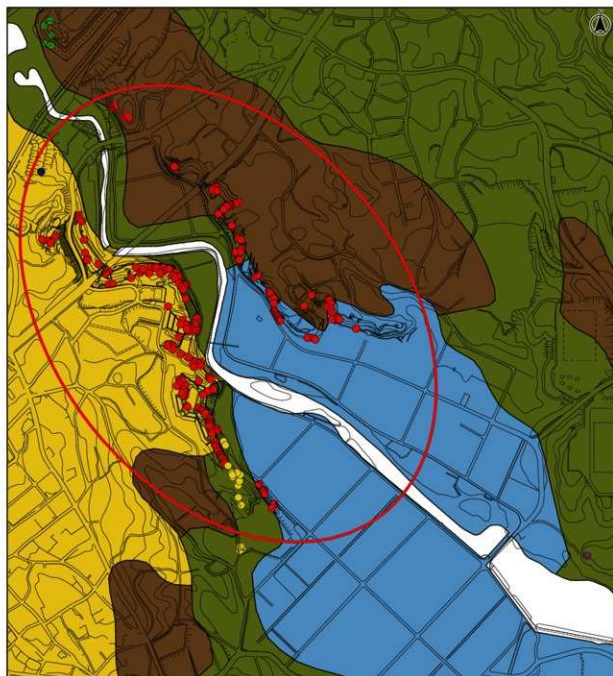
*国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 航空写真 (1944年米軍撮影) を背景に作成

0 200m
S=1/8,000

凡例

- | | |
|---------------------|------------|
| ● 本報告古墓群 | ● 奥首原地区古墓 |
| ● 比嘉原地区古墓群 | ● 西先謝原地区古墓 |
| ● 田慶志原地区古墓群(ミーチェ地区) | |
| ○ 調査範囲 | |

図3.5. 米軍空撮写真及び遺構位置図

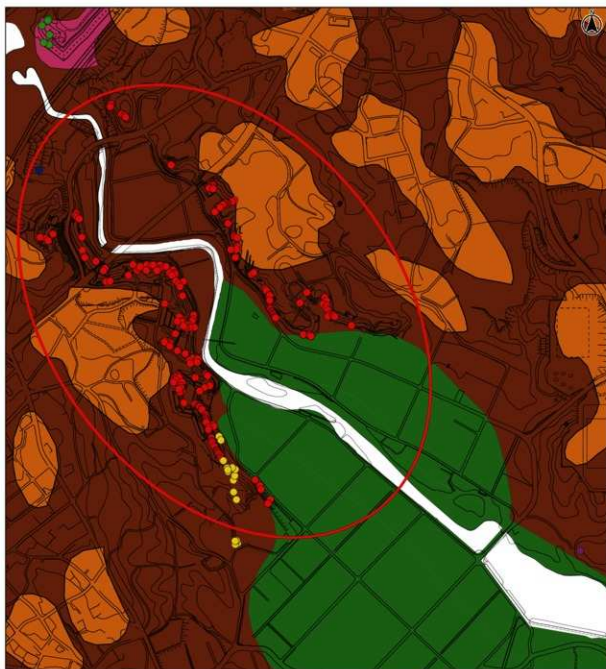


* 沖縄県地図情報システム（オープンデータ）土地分類基本調査図を背景に作成

凡例

- | | | |
|---------------------|------------|-------------|
| ● 本報告古墓群 | ● 奥首原地区古墓 | ■ 沖積層 |
| ● 比嘉原地区古墓 | ● 西先謝原地区古墓 | ■ 国頭層群嘉陽層 |
| ● 田慶志原地区古墓群（ミーチェ地区） | | ■ 琉球層群国頭礫層 |
| ○ 調査範囲 | | ■ 琉球層群琉球石灰岩 |

図3.6. 表層地質図及び遺構位置図



* 沖縄県地図情報システム（オープンデータ）土地分類基本図を背景に作成

凡例

● 本報告古墓群	● 奥首原地区古墓	■ 低地
● 比嘉原地区古墓群	● 西先謝原地区古墓	■ 丘陵地
● 田慶志原地区古墓群（ミーチェ地区）		■ 台地・段丘
○ 調査範囲		■ 段丘を刻む谷

図3.7. 地形分類図及び遺構位置図

第2節 古墓の分類

これまで町教育委員会では、億首川流域周辺で埋蔵文化財調査を実施し、様々な遺構を記録してきた。なかでも露頭する琉球石灰岩および丘陵地一帯では、岩陰墓や掘込墓などの遺構を多く確認している。

今回計画した埋蔵文化財予備調査も過去に調査した地域と同じ環境に立地することから確認される遺構も古墓＝墓跡が主になると予測できた。よって、現地調査における墓跡の判別については以下、三つの基準を設定した。

- ◎：構築に伴い人為的痕跡が明確にみられる墓跡。
- ：遺体又は、蔵骨器を安置できる空間はあるが、人為的痕跡や遺物などが確認できない墓跡。
- △：岩盤の崩落や埋没等により、情報が断片であるが、人為的とみられる不自然な痕跡がみられる墓跡。

さらに、今帰仁村でおこなわれた調査報告例や古墓に関する研究資料[※]を参考に墓の造墓形式から分類をおこなった(図3.8)。なお、墓外観に関しては、墓を囲む石積の有無、墓室の閉塞状況等で岩陰掘込墓、壁龕墓などさらなる分類・呼称設定[※]も可能ではあるが、調査で確認した墳墓の殆どが移転や墓として使用されていない「空き墓」であったことから

墓外観の分類はおこなっていない。以下、分類した墓跡を詳解し、予備調査で確認した遺構については第IV章第1～5節に示す。

1. 岩陰墓

露頭する琉球石灰岩の岩盤および丘陵地一帯の岩陰や窪地など、傾斜した自然地形をそのまま利用し、蔵骨器などを安置できる平坦面が備わる墓跡。また、開口部から前面に自然石や切石などを積み上げて閉塞し墓口や墓室などを設けた構造もこれに加える。

2. 岩陰石積墓

露頭する琉球石灰岩の岩盤および丘陵地一帯の岩陰や窪地など、傾斜した自然地形をそのまま利用し、開口部の前面には自然石や切石などを積み上げて閉塞した墓跡。また、一定の高さまで石材を積み上げて部分的に開閉し墓室を設けた構造もこれに加える。

3. 岩陰掘込墓

露頭する琉球石灰岩の岩盤および丘陵地一帯の岩陰や窪地などをそのまま利用し、さらに横穴を掘込んで墓室を構築した墓跡。また、開口部の前面には、自然石や切石などを積み上げて墓室を設けた構造や石積みなどの痕跡はなく墓室のみの構造もこれに加える。

4. 掘込墓

露頭する琉球石灰岩の岩盤および丘陵地一帯の斜面や崖地に横穴を掘り込んで墓室を構築した墓跡。また、開口部の前面には、自然石や切石などを積み上げて墓口や墓室を設けた構造と墓口がない構造のほか、掘り込んだ横穴そのものが墓口となる構造もこれに加える。

5. 仮墓

琉球石灰岩の台地および丘陵地一帯の斜面や崖地の平坦な場所に自然石や切石、コンクリート造りの比較的小さい墓跡。一個人や成人していない子どもが葬られた一時的な仮墓として使用することが多い。

6. 不明墓

露頭する琉球石灰岩の岩盤および丘陵の自然地形が形作る岩陰や窪地を利用しているが、岩盤の崩落や土砂などの堆積により情報が断片である推測墓(不明)。岩陰や窪地には人為的とみられる不自然な痕跡を残した場所もこれに加える。

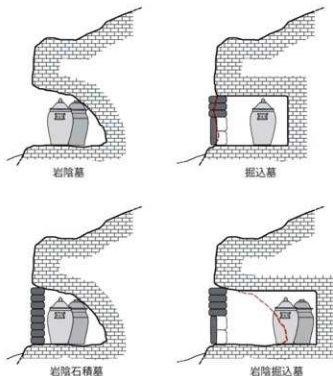


図3.8. 古墓の分類

※1 名倉真 宣勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社 1999年

今帰仁村教育委員会編『運天古墳群1—村内遺跡発掘調査報告—』(今帰仁村文化財調査報告書第33集) 2013年

上原 静『沖縄諸島における厨子文化と葬儀制(3) —古墓の造形と厨子—』『南島考古』第37号 沖縄考古学会 2018年

第3節 遺物の分類（蔵骨器）

今回、埋蔵文化財予備調査で確認した専用蔵骨器は合計12点。確認した専用蔵骨器のなかには、古墓の墓室内に納められた蔵骨器や蔵骨器転用品と推定される沖縄産無釉陶器の壺・水甕も含まれる。

専用蔵骨器については、近世墓調査の蓄積がある、那覇市・浦添市・金武町の近世墓発掘調査報告書や「厨子甕の分類・編年に関する研究資料」^{※1}を参考にし、以下のように分類した（図3.9）。

1. 無頸甕形（ボージャー形）
2. 有頸甕形
3. 有頸底付き甕形
4. 外反甕形
5. 陶製家形

1. 無頸甕形（ボージャー形）

身は、丸く肥厚する口縁部に無頸またはごく短い頸部に象徴され、方言で「ボージャー」と呼称される。肩部や胴部の膨らみ、窓枠の造形等の特徴に時代的な変化（新旧関係）が認められる。窓枠の造形は平葺形・唐破風形・寄棟形に分類でき、今回の調査で確認した無頸甕形の胴部には平葺形の窓枠と線彫（沈線文）による蓮華が認められる。

2. 有頸甕形

ほとんどの有頸甕形はマンガン施釉されることから、「マンガン」と汎称されるものである。頸部はほぼ直立し、頸部と肩部の境が明瞭に屈曲する器形である。横位突帯や沈線で肩部/胴部/胴部下位に文様帯が区画されるパターンが一般的である。屋門を中心に貼付文や線彫（沈線文）による蓮華文や僧形人物等の文様装飾を配置する場合が多い。屋門に

は唐破風形・アーチ形などがあり、屋門の形状や文様意匠等で分類も可能である。蓋は膨らむ体部に鈐がめぐる鉢形で、蓋は宝珠形・饅頭形・偏平形など複数種類がある。

3. 有頸底付き甕形

有頸甕形の胴部上位に瓦屋根の底が付くタイプ。貼付文による文様区画や文様装飾（蓮華・僧形人物・獅子など）が施されるパターンが多い。今回の調査では1点のみ確認した。この蔵骨器は底部分が狭く、胴部には僧形人物・蓮華の文様装飾が認められる。

4. 外反甕形

有頸甕形とともに「マンガン」と汎称する蔵骨器の範疇で扱われることもあるが、あまり膨らまない胴部に口縁部が外反する器形的特徴から、有頸甕形に後続し、時代的には新しいと推測される型式である。線彫（沈線）主体による文様の簡略化、サイズの小型化も当該タイプの特徴に挙げられる。

5. 陶製家形

今回の調査では上焼コバルト掛け厨子を1点、身破片1点、赤焼家型（御殿型）と思われる身1点を確認した。上焼コバルト掛け厨子は明治以降に輸入されるようになった西洋コバルトを前面に掛けたものと飴釉を部分的に添え、二色にするものがある。蓋部の頂点にシャチホコ・獅子・龍頭などの貼付けの装飾が多い。赤焼家型と思われる破片については素焼きの家型厨子で胴部に僧形人物の文様装飾が認められる。

なお、予備調査で確認した遺物の数量と保存目的に採取した遺物の数量は一致しない。採取した遺物の詳細については、第IV章第7節に示す。

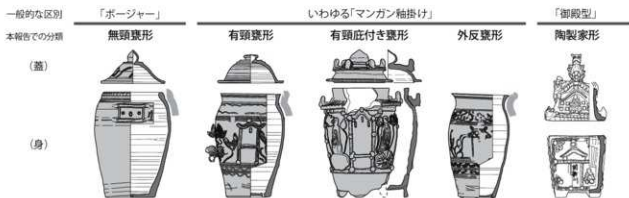


図3.9. 陶製専用蔵骨器（厨子甕）分類

※1 内里 進「Ⅲ、厨子甕の編年」浦添市教育委員会編『伊祖の入り御拝願忌の厨子甕と被褥者』（浦添市文化財調査研究報告書 第25集）1997年
那覇市教育委員会編『銘巧古墓群Ⅰ』（那覇市文化財調査報告書第39集）1998年
沖縄県立博物館・美術館編『博物館企画展「ずしあめの世界」2008年

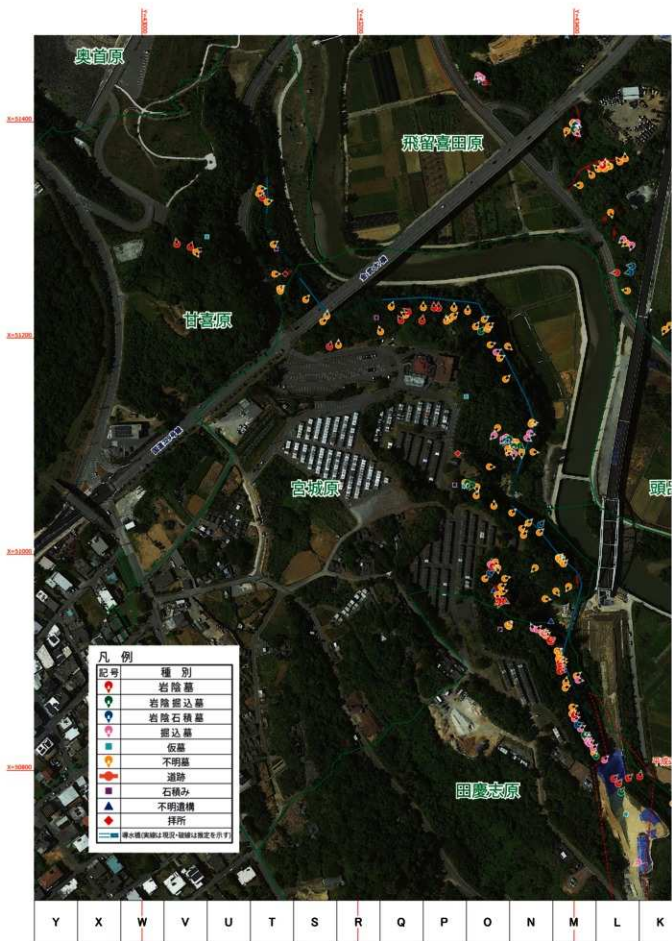


図4.1. 悉皆分布調査範囲の空中写真及び遺構位置図

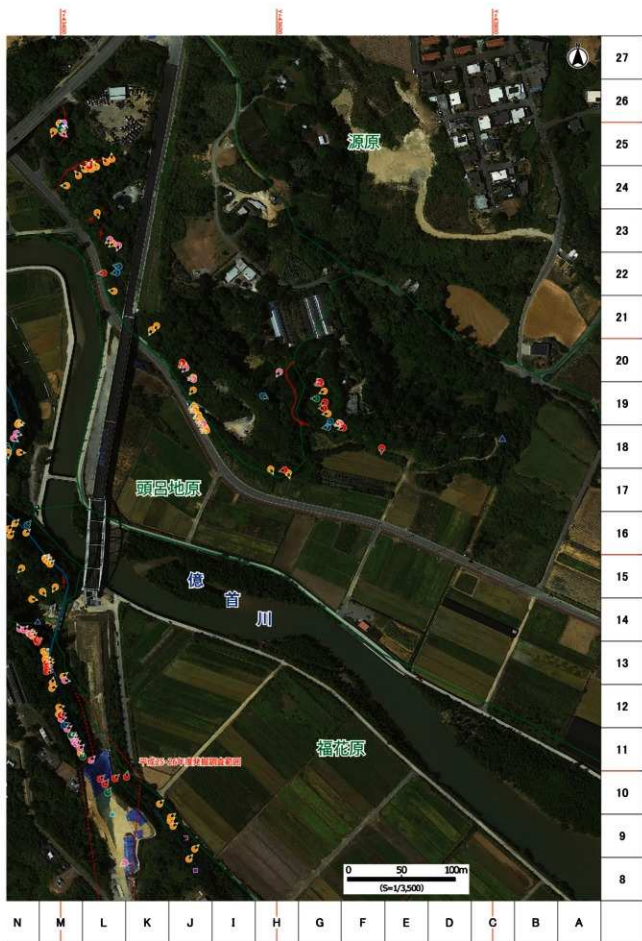




図4.2. 悉皆分布調査範囲の地形図及び遺構位置図

